

陽林会（第16回）奈良県 當麻寺の旅

平成31年4月24日 岩水記録

平成31年4月22日（月）林陽寺駐車場を7時10分に出発、岐阜駅にて名古屋・岐阜組の4名が乗車し、総勢23名にて當麻寺に向かう。羽島から名神、京滋バイパス経由して太子インターを出て竹内街道を當麻寺に11時頃到着。門前前の駐車場に車を置き、10分ほど歩いて山門着。すぐに中ノ坊（高野山真言宗別格本山）に入る。當麻曼荼羅の絵解き、食事、諸堂拝観、庭園散策後、2時30分頃に次の拝観寺院 叡福寺（聖徳太子のお寺）に向かう。3時30分頃現地発、7時頃帰山。ご苦労様でした。



當麻寺（たいまでら）

奈良の東、葛城市當麻にある寺。もとは聖徳太子の弟、麻呂子親王が612年に河内国につくられたという禅林寺を、681年に役行者開創の当地に移したものと

伝えられる。白鳳時代から天平時代にかけて金堂、講堂や東西両塔などの伽藍が完成されたと見られ、現在はいくつかの塔頭寺院がその伽藍を守護するかたちをとっている。はじめは南都六宗の一つ、三論宗を奉じていたが、弘仁年間に弘法大師が当寺に参籠して以来真言宗となる。その後南北朝時代に浄土宗も入り、現在では真言、浄土両宗を奉じる珍しいかたちをとっている。東西両塔は創建当時のもので、揃って残っているのは貴重であり、中将姫にご縁がある蓮の糸で織り表した當麻曼荼羅は有名である。

林陽寺の隣の芥見大洞に願成寺があり中将姫が植えたという天然記念物の誓願桜がある。そんな縁からも一度當麻寺にお参りしたいと思っていた。

【中将姫】日本の伝説上の人物。右大臣藤原豊成の娘。父の左遷を悲しみ、大和當麻寺に入って尼となり、仏行に励んだ徳により仏の助けを得て、一夜のうちに蓮の茎の糸で観無量寿經の曼荼羅(まんだら)を織ったとされる。謡曲「当麻(たえま)」ほか、浄瑠璃・歌舞伎に取り上げられている。



【當麻曼荼羅】西方の三聖である阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩を中心に極楽浄土の有様を絢爛豪華に描く。その原本である根本曼荼羅（国宝・奈良時代・非公開）は中将姫が蓮糸で織り表したもので、その美しい極楽世界を伝えるために、代々、転写されて受け継がれてきた。曼荼羅堂に祀られる転写本は、室町時代の文亀本（重文）と、江戸時代の貞享本の二例が現存しており、そのいずれかが厨子（国宝）に納められ、當麻寺本尊として祀られる。

この曼陀羅は密教のものと異なり、それ自体が経典の解説となっており、分りやすく人々を教化している事から、浄土信仰の深まりとともに人々のより処となり、「絵解き説法会」が行われるなど、広く親しまれるようになった。『當麻曼陀羅』は大きく五つに分かれ、これらは『浄土三部經』の

「観無量寿経」の世界を構成している。絵解きはまず左端の阿闍世王の物語から始まり、右端の観想によって極楽浄土を観る方法、さらに阿弥陀如来の慈悲が衆生に受けとられる有様を説き、誰も分らない死後の世界を示しながら、阿弥陀様に帰依することを教えている。

『當麻曼陀羅絵解』はまさしく中将姫の願った「多くの人々に仏の救いを」する為のアプローチなのであるとされる。(ネットより)

叡福寺(えいふくじ) 推古天皇が聖徳太子の墓を守護するために建立された寺です。戦国時代には、織田信長の兵火で焼失しましたが、江戸時代に豊臣秀頼によって聖霊殿が再建され、次第に伽藍の復興が図られました。奥に聖徳太子の墓所とされる叡福寺北古墳(磯長墓〈しながのはか〉)があり参拝。



「當麻曼荼羅」は、

阿弥陀浄土変相(あみだじょうどへんそう)図の一種。『観無量寿経(かんむりょうじゅきょう)』のうちとくに善導の四帖疏(しじょうしよ)に基づく図解であるから、観無量寿経変相図または観経変(観経曼荼羅)という。図の中央下辺に縁起銘文を記す。曼荼羅の由来は『古今著聞集(ここんちよもんじゅう)』



う)』巻二の説話に詳しい。天平宝字(てんぴ



ょうほうじ)7年(763)に出家した横佩(よこはぎ)の大臣(おとど)の女(むすめ)(中将姫)が生身の阿弥陀仏を見ようと祈願すると、1人の比丘尼(びくに)が現れ、百駄の蓮茎(はずぐき)を用意せよと告げた。勅奏(ちよくそう)によ

り集められた蓮糸は、化女の助けにより一夜のうちに曼荼羅に織り上げられ、阿弥陀の浄土を観想することができるといい、姫はのちに極楽から来迎を受けたという。



この曼荼羅をみて、上部に描かれた「飛天」や「建



物」の描き方が、中国の「敦煌の莫高窟や榆林窟」壁画と同じようであるのに驚いた。時代考証は別にして、ここに描かれた「観無量寿経変相図」は、「榆林窟」のものと同じようなものである。こうした図柄はシルクロードの終着駅としての奈良に伝わっていたのには驚きました。